

<原著論文>

[学生の精神衛生研究班]

大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴に ついての検討 (4)

都 筑 学 早 川 宏 子
宮 崎 伸 一 村 井 剛
早 川 みどり 永 井 暁 行
梁 晋 衡

Investigation about Types of College Life Perspective and Their Psychological Characteristics (4)

Abstract

This study aimed to examine the extension to which different types of college life perspective contributed to develop basic social skills which would be needed in the process concerning career choice before graduation from university. The participants were 820 undergraduate students in Chuo University. They were asked to complete a sheet of questionnaire which consisted of the following items; college life perspective, the degree of time use satisfaction in daily life, adaptation for college life, daily life skill, social self-regulation, career exploration behavior, and career choice. Using cluster analysis with scores of 17 college life activities, six different types of college life perspective were extracted. Latent structural modeling clarified that social self-regulation had positive effects on enhancing daily life skills and also leading career exploration behavior. Higher level of daily life skills caused better adaptation for college life, too. Based on these findings, functions of college life perspective on forming social skills which proceeds real career choice before graduation from university were discussed.

1. 問題と目的

本研究は、大学生生活の過ごし方の違いによって、進路希望や進路選択行動、実際の進路決定状況に差異が見られるかどうかを明らかにしようとするものである。

都筑ら（2011, 2012, 2013）は、これまでに3つの調査を通じて、大学生生活の過ごし方尺度（溝上, 2009）を用いて、大学生における学生生活の過ごし方を検討し、いくつかの異なるタイプが存在することを明らかにしてきた。都筑ら（2011）は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」の3因子を抽出し、クラスタ分析によって、限定的対人活動群、発展的対人活動群、ヴァーチャル活動群、自主的勉強群、消極的活動群、全般的活動群という6つの異なるタイプの学生がいることを明らかにした。都筑ら（2012）は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学での授業・勉強」の4因子を抽出し、クラスタ分析によって、活動全般低下群、主体的勉強群、授業出席勉強群、対人活動中心群、授業回避群、ヴァーチャル活動群の6つの異なるタイプを明らかにした。都筑ら（2013）も、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学での授業・勉強」の4因子を抽出し、クラスタ分析によって、ヴァーチャル活動群、低活動群、授業出席勉強群、自主勉強中心群、高活動群、対人活動中心群の6つの異なるタイプを明らかにした。

都筑ら（2013）の研究からは、対人活動中心群や部活動・サークル活動にかかわっている学生ほど、コミュニケーション能力・クリティカルシンキング・ハーディネスなどの大学卒業後に必要とされるような能力が高いことが明らかになった。このことから、学業に加えて、対人的な活動に積極的に関与することで、そうした社会的な能力が獲得されていくのではないかと考えられた。さらに、こうした社会的な能力を獲得することによって、大学生の進路選択や進路決定の過程がよりスムーズに展開されていくのではないかと考えられる。

以上のような研究成果をふまえて、本研究においては、次のような2点を検討することを目的とする。第1は、大学生生活の過ごし方の異なるタイプにおいて、日常生活スキルや社会的自己制御、学校適応感の程度に差異が見られるかどうかを検討することである。第2は、大学1～4年生における進路選択・進路決定の実際の状況を検討するとともに、社会的自己制御・日常生活スキル・学校適応感が、1～4年生の進路探索行動や4年生における進路決定満足度に及ぼす影響を検討することである。

[都筑 学]

2. 方 法

2.1 調査対象

調査対象者は、中央大学に在籍する学生820人（平均年齢20歳1ヶ月、標準偏差1歳4ヶ月）である。

対象者の性別は、男477人、女341人、不明2人だった。男女比は約1.4:1だった。全学（理工学部を含む）の男女比は2:1であり、その数字と比べてみると女子の割合が高かった。

学年の内訳は、1年381人、2年144人、3年163人、4年130人、不明2人であり、1年生が約半分を占めていたが、2～4年生の割合はほぼ等しかった。

学部の内訳は、法430人、経済77人、商238人、理工3人、文53人、総合政策17人、不明2人であり、法学部が半分強を占めていた。

住まいの内訳は、自宅468人、自宅外348人、不明4人であり、自宅と自宅外の比率は約1:0.7であり、現状をおおよそ反映した結果になっていた。

部活動・サークルへの所属は、体育連盟145人、サークル499人、所属なし171人、不明5人だった。

2.2 調査内容

質問紙の構成は、以下の通りである。

① フェースシート

性別、学年、年齢、学部、住まいを尋ねる5項目を用いた。

② 大学生生活の過ごし方

溝上（2009）が用いた大学生生活の過ごし方の尺度17項目を用いた。授業、授業外の学習、自主的学習、読書、マンガ・雑誌や新聞を読む、クラブ・サークル活動、アルバイト、同性や異性の友人との付き合い、テレビ、ゲーム、通学時間などについて、1週間に費やす時間数を(1) 全然ない、(2) 1時間未満、(3) 1～2時間、(4) 3～5時間、(5) 6～10時間、(6) 11～15時間、(7) 16～20時間、(8) 21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

③ 時間の使い方の満足度

Benesse 教育研究開発センター（2009）で用いられた日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目を用いた。時間の使い方を100点満点で評定し、0点から100点までの10点刻みの11段階の中から選択する方法によって回答を求めた。

④ 学校への適応感

大久保（2005）が開発した、学校への適応感尺度（居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼感・受容感、劣等感の無さ、の4下位尺度30項目）について、「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの5件答法で回答を求めた。

⑤ 日常生活スキル

島本・石井（2006）が開発した、日常生活スキル尺度（大学生版）（親和性、リーダーシップ、計画性、感受性、情報要約力、自尊心、前向きな思考、対人マナー、の8下位尺度24項目）について、「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」までの4件答法で回答を求めた。

⑥ 社会的自己制御

原田・吉澤・吉田（2008）が開発した、社会的自己制御尺度（自己主張、持続的対処・根気、感情・欲求抑制、の3下位尺度29項目）について、「1. 全くあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの5件答法で回答を求めた。

⑦ 進路探索行動

若松（2006）が開発した、進路探索行動尺度（自己内省、情報収集、外的活動、の3下位尺度13項目）について、1～3年生では「これまでにどのくらいあったか」、4年生では「就職・進学のための活動を振り返って、どれくらいおこなったか」を「1. ほとんどしなかった」から「5. 何回もした」までの5件答法で回答を求めた。

⑧ 希望進路・職種

1～3年生に対して、「卒業後の希望進路や既に職種を決めているか」について、「1. 既に決まっている」「2. ある程度は決まっている」「3. 考えてはいるが決まっていない」「4. まだ考えていない」の4つから選択を求めた。1や2の場合には、職種を尋ねた。

⑨ 進路決定のための活動と進路決定状況

4年生に対して、就職・進学のための活動の開始時期、卒業後の進路の決定の有無、職種、内定・合格数や内定・合格の時期、進路決定状況についての満足度（10件答法）についての回答を求めた。

2.3 調査期日

2013年7月～9月に調査をおこなった。

2.4 調査手続き

質問紙調査の実施に関しては、次の2つの異なる方法を用いた。第1は、授業時間内に印刷

した質問紙を配布し、回答してもらう方法である。第2は、放送大学のリアルタイム評価支援システム (REAS) を用いて作成したウェブ上での質問紙に回答してもらう方法である。質問紙への回答は747人、REASでの回答は73人だった。

ウェブ上での質問紙を用いたのは、就活中で大学に来ることが少なくなる上級生のデータを収集することを目的としたためである。学年の内訳を見ると、質問紙 (1年380人, 2年121人, 3年138人, 4年97人), REAS (1年1人, 2年13人, 3年25人, 4年32人) であり、当初の目的はある程度達成されたといえる。

[都筑 学]

3. 結果と考察

3.1 尺度の信頼性の検討

3.1.1 学校への適応感尺度, 日常生活スキル尺度, 社会的自己制御尺度

学校への適応感尺度 (大久保, 2005), 日常生活スキル尺度 (島本・石井, 2006), 社会的自己制御尺度 (原田・吉澤・吉田, 2008), 進路探索行動尺度 (若松, 2006) に関して, それぞれの下位尺度の α 係数を求めた。4つの尺度の α 係数, 平均値と標準偏差は表 3-1-1 に示

表 3-1-1 4つの尺度の下位尺度ごとの α 係数と平均値, 標準偏差

	全学年			1～3年生			4年生		
	α 係数	平均値	SD	α 係数	平均値	SD	α 係数	平均値	SD
学校への適応感尺度									
居心地の良さの感覚	0.93	3.36	0.82	0.93	3.34	0.80	0.95	3.48	0.91
課題・目的の存在	0.86	3.52	0.78	0.86	3.51	0.78	0.86	3.56	0.80
被信頼感・受容感	0.89	2.78	0.81	0.90	2.77	0.80	0.89	2.84	0.89
劣等感	0.77	2.60	0.69	0.76	2.65	0.68	0.75	2.35	0.70
日常的スキル尺度									
親和性	0.79	2.90	0.71	0.80	2.88	0.71	0.78	3.01	0.71
リーダーシップ	0.80	2.50	0.68	0.80	2.47	0.68	0.78	2.62	0.71
計画性	0.74	2.59	0.71	0.75	2.57	0.71	0.68	2.73	0.67
感受性	0.66	2.88	0.62	0.66	2.85	0.62	0.63	3.03	0.61
情報要約力	0.78	2.70	0.62	0.78	2.68	0.62	0.74	2.81	0.62
自尊心	0.63	2.55	0.66	0.63	2.52	0.66	0.60	2.73	0.65
前向きな思考	0.61	2.66	0.68	0.59	2.62	0.67	0.74	2.84	0.73
対人マナー	0.75	3.39	0.55	0.76	3.38	0.55	0.72	3.47	0.55
社会的自己制御尺度									
自己主張	0.84	3.17	0.58	0.84	3.15	0.58	0.85	3.27	0.60
持続的対処・根気	0.77	3.41	0.61	0.77	3.39	0.61	0.76	3.57	0.59
感情・欲求抑制	0.76	3.49	0.57	0.76	3.46	0.56	0.75	3.64	0.56
進路探索行動尺度									
自己内省				0.85	2.87	0.98	0.84	3.50	0.93
情報収集				0.87	2.72	1.01	0.83	3.46	0.94
外的活動				0.83	2.10	0.86	0.73	2.59	0.86

した通りである。なお、1～3年生と4年生の進路探索行動に関しては、質問項目は同一であるが、教示の内容が違うので、別々に α 係数を算出した。表3-1-1の結果から、「自尊心」と「前向きな思考」の α 係数がやや低かったが、それ以外の下位尺度の α 係数は信頼できる結果が得られた。

3.2 大学生生活の過ごし方

3.2.1 大学生生活の過ごし方のタイプ

都筑ら（2012, 2013）において、大学生生活の過ごし方について既に因子分析をおこなっているので、ここでは都筑ら（2012, 2013）と同じ因子構造であるかを検討するために、Amos 20を用いて確認的因子分析をおこなった。その結果は表3-2-1に示されている。適合度指標は、 $\chi^2=260.51$, $df=54$, $p<.001$, $GFI=.95$, $AGFI=.92$, $CFI=.87$, $RMSEA=.07$ であった。適合度指標がほぼ信頼できる値を示したことから、この因子構造モデルに従って、後の検討を進めていくことにした。因子名は以下の通りである。第1因子は「授業外の自主的勉強」、第2因子は「対人交際」、第3因子は「インターネット・マンガ・ゲーム」、第4因子は「大学の授業・勉強」である。

都筑ら（2013）は、大学生生活の過ごし方のタイプを6クラスタに分類し、検討をおこなった。そこで、本稿では都筑ら（2013）と同じように、4つの下位尺度の合成得点のZスコアを用いて6クラスタを検討した。Ginkgoを用いて、2ステップのクラスタ分析をおこなった（Gore, 2000；Luyckxら, 2008；Schwartzら, 2011）。最初に、4下位尺度の標準化された

表 3-2-1 大学生生活の過ごし方の確認的因子分析

	因子1	因子2	因子3	因子4
1. 勉強のための本（新書や専門書など）を読む	0.88			
7. 授業とは関係のない勉強を自主的にする	0.60			
4. 新聞を読む	0.35			
3. 異性の友だちと交際する		0.59		
13. 同性の友だちと交際する		0.81		
12. コンパや懇親会などに参加する		0.32		
6. クラブ・サークル活動・部活動をする		0.21		
11. マンガや雑誌を読む			0.51	
8. ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする			0.29	
15. 娯楽のための本（小説や一般書など）を読む			0.56	
2. インターネットサーフィンをする			0.35	
14. 大学で授業や実験に参加する				0.44
10. 授業に関する勉強（予習や復習、課題など）をする				0.96
因子間相関	因子1	-0.01	0.33	0.37
	因子2		0.26	0.08
	因子3			0.15

得点を用いて, Ward 法 (平方ユークリッド距離) で, 6 クラスタを分類し, 次に, 得られた 6 クラスタの中心を用いて, K-means 法でクラスタ分析をおこなった.

図 3-2-1 には, 大学生生活の過ごし方 4 下位尺度における各クラスタの得点 (Z スコア) を示した.

クラスタ 1 (206人) は, 「大学での授業・勉強」は多かったが, 「授業外の自主的勉強」はほぼ平均であり, 「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」は少なかった. 大学の授業には熱心に参加するが, それ以外の活動にはあまり取り組まない群であるといえるだろう.

クラスタ 2 (89人) は, 「インターネット・マンガ・ゲーム」は多かったが, それ以外の「授業外の自主的勉強」「対人交際」「大学の授業・勉強」はほぼ平均だった. このクラスタは, インターネット等ヴァーチャルな活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう.

クラスタ 3 (59人) は, 「授業外の自主的勉強」は多かったが, 「対人交際」が少なく, 「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」は平均とほぼ同じだった. このクラスタは, 大学の授業以外の勉強に取り組んでいる群だといえるだろう.

クラスタ 4 (58人) は, 「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」「対人交際」のいずれも多かった. このクラスタは, 大学生生活における活動に対して積極的に取り組んでいる群であるといえるだろう.

クラスタ 5 (130人) は, 「対人交際」が多く, 「インターネット・マンガ・ゲーム」「大学の授業・勉強」はほぼ平均的だった. このクラスタは, 対人関係的な活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう.

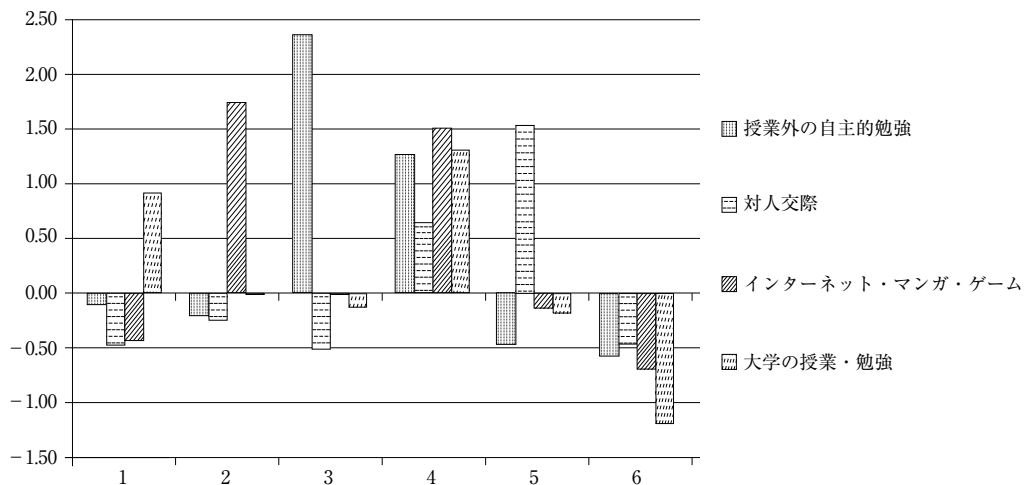


図 3-2-1 クラスタ分析による生活時間の過ごし方のタイプ (Z スコア)

クラスタ6 (196人) は、「大学の授業・勉強」「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「対人交際」のいずれも少なかった。このクラスタは、授業や授業外の勉強を含め、全体に活動が不活発な群であるといえるだろう。

以上の結果により、都筑ら (2013) と同じようなクラスタが得られたので、クラスタ1を授業出席勉強群、クラスタ2をヴァーチャル活動群、クラスタ3を自主勉強中心群、クラスタ4を高活動群、クラスタ5を対人活動中心群、クラスタ6を低活動群と名付けた。

[梁 晋衡]

3.2.2 大学生生活の過ごし方と心理的特徴の関係について

大学生生活の過ごし方の6タイプが、どのような心理的特徴を持っているのかについて検討していく。

① 学校への適応感

表3-2-2には、大学生生活の過ごし方6タイプにおける学校への適応感 (大久保, 2005) の4下位尺度の平均値を示してある。「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼感・受容感」「劣等感の無さ」の4下位尺度ごとに、1要因の分散分析をおこなった。その結果、「居心地の良さの感覚 ($F(5,724) = 12.81, p < .001$)」「課題・目的の存在 ($F(5,721) = 10.87, p < .001$)」「被信頼感・受容感 ($F(5,720) = 10.58, p < .001$)」と3項目ともに、大学生生活の過ごし方タイプの主効果が有意だった。

そこで、これら3項目に関して時間の過ごし方タイプによる違いを Tukey の HSD 法により検定したところ、「居心地の良さの感覚」については、対人活動中心群が、授業出席勉強群、ヴァーチャル活動群、自主勉強中心群、低活動群の各群に比べ有意に高く ($p < .05$)、高活動群がヴァーチャル活動群に比べ優位に高かった ($p < .05$)。「課題・目的の存在」については、対人活動中心群が、授業出席勉強群、ヴァーチャル活動群、低活動群の各群に比べ有意に高く ($p < .05$)、高活動群も同様に、授業出席勉強群、ヴァーチャル活動群、低活動群の各群に比べ有意に高かった ($p < .05$)。また、授業出席勉強群が、ヴァーチャル活動群に比べ有意に高かった ($p < .05$)。さらに、「被信頼感・受容感」については、対人活動中心群が、授業出席勉強群、ヴァーチャル活動群、自主勉強中心群、低活動群の各群に比べ有意に高く ($p < .05$)、高活動群がヴァーチャル活動群に比べ有意に高かった ($p < .05$)。また、授業出席勉強群が、ヴァーチャル活動群に比べ有意に高かった ($p < .05$)。

学校への適応感は、個々の学生の学校という環境に対して、「どの程度うまくフィットしていると感じているか」「どの程度大学生生活を享受しているか」「どの程度将来に対して今の生活

表 3-2-2 大学生生活の過ごし方 6 タイプにおける学校への適応感の平均値

	授業出席 勉強群(a)		ヴァーチャ ル活動群(b)		自主勉強 中心群(c)		高活動群 (d)		対人活動 中心群(e)		低活動群 (f)		合計		F	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
居心地の良さ の感覚	3.30	0.80	3.07	0.82	3.22	0.92	3.56	0.59	3.81	0.67	3.26	0.85	3.37	0.82	12.81***	a, b, f<d, e
課題・目的の 存在	3.52	0.76	3.21	0.76	3.57	0.85	3.89	0.55	3.77	0.69	3.34	0.8	0.78	0.03	10.87***	a, b, f<d, e
被信頼感・受 容感	2.74	0.79	2.43	0.80	2.76	0.84	2.91	0.63	3.17	0.74	2.70	0.84	0.81	0.03	10.58***	b<d/a, b, c, f<e
劣等感のなさ	2.62	0.73	2.59	0.72	2.47	0.65	2.64	0.56	2.56	0.67	2.61	0.71	0.69	0.03	0.59..	

注: *** $p<.001$

が役に立っていると感じているのか」「抑うつ感はないか」の4項目の総体を示したものである(大久保, 2005)。対人活動中心群は, 他の学生, 教師, 職員(これらを大学の環境といってもよい)などとの交流に多くの時間を使う群であり, このタイプの学生が「高活動群」を除く他のタイプの学生と比べて学校への適応感が高いことは納得できる。つまり, 対人活動中心群は6群の中では, 大学生生活にもっとも適応しているタイプであるといえる。

② 日常生活スキル

表3-2-3には, 日常生活スキル(島本・石井, 2006)の8下位尺度の平均値を大学生生活の過ごし方6タイプごとに示してある。「親和性」「リーダーシップ」「計画性」「感受性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」「対人マナー」の8下位尺度ごとに1要因の分散分析を行った。その結果, 「親和性 ($F(5,723)=8.00, p<.001$)」「リーダーシップ ($F(5,723)=7.52, p<.001$)」「計画性 ($F(5,722)=6.33, p<.001$)」「感受性 ($F(5,720)=6.50, p<.001$)」「情報要約力 ($F(5,722)=5.69, p<.001$)」「自尊心 ($F(5,716)=3.46, p<.01$)」「対人マナー ($F(5,723)=7.08, p<.001$)」の7項目に関して, 大学生生活の過ごし方タイプの主効果が有意だった。

次に, これら7項目に関して時間の過ごし方タイプによる違いを, TukeyのHSD法により検定した。「親和性」については, 対人活動中心群が, 授業出席勉強群, ヴァーチャル活動群, 自主勉強中心群, 低活動群の各群に比べ有意に高く ($p<.05$)。「リーダーシップ」については, 対人活動中心群が, 授業出席勉強群, ヴァーチャル活動群, 低活動群の各群に比べ有意に高かった ($p<.05$)。「計画性」については, 自主勉強中心群が, 授業出席勉強群, ヴァーチャル活動群, 低活動群の各群に比べ有意に高く ($p<.05$)。高活動群および対人活動中心群が, ヴァーチャル活動群に比べ有意に高かった ($p<.05$)。「感受性」については, 対人活動中心群が, 授業出席勉強群, ヴァーチャル活動群, 低活動群の各群に比べ有意に高く ($p<.05$)。高活動群がヴァーチャル活動群に比べ優位に高かった ($p<.05$)。「情報要約力」は, 自主勉強中心群が, 授業出席勉強群, ヴァーチャル活動群, 低活動群の各群に比べ有意に高く ($p<.05$)。高

表 3-2-3 大学生生活の過ごし方 6 タイプにおける日常生活スキルの平均値

	授業出席 勉強群(a)		ヴァーチャ ル活動群(b)		自主勉強 中心群(c)		高活動群 (d)		対人活動 中心群(e)		低活動群 (f)		合計		F	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
親和性	2.83	0.71	2.67	0.77	2.79	0.80	2.96	0.65	3.22	0.64	2.88	0.70	2.90	0.72	8.00***	a, b, c, f<e
リーダーシップ	2.38	0.69	2.31	0.70	2.56	0.70	2.56	0.58	2.77	0.60	2.45	0.67	2.49	0.68	7.52***	a, b, f<e
計画性	2.55	0.73	2.31	0.66	2.85	0.73	2.68	0.63	2.74	0.60	2.52	0.73	2.58	0.71	6.33***	a, b<c
感受性	2.85	0.65	2.62	0.66	2.85	0.65	3.00	0.67	3.08	0.47	2.84	0.62	2.88	0.63	6.50***	b<d/a, b, f<e
情報要約力	2.68	0.64	2.57	0.63	2.94	0.70	2.88	0.49	2.80	0.57	2.58	0.60	2.70	0.62	5.69***	a,b,f<c/b,f<d
自尊心	2.47	0.68	2.44	0.65	2.72	0.68	2.57	0.67	2.70	0.61	2.50	0.65	2.54	0.66	3.46**	a, b<e
前向きな思考	2.57	0.72	2.64	0.73	2.66	0.77	2.72	0.72	2.79	0.61	2.60	0.65	2.64	0.69	1.93	
対人マナー	3.48	0.47	3.35	0.51	3.54	0.51	3.50	0.52	3.45	0.55	3.21	0.61	3.40	0.55	7.08***	f<a, c, d, e

注: ** $p<.01$ *** $p<.001$

活動群が、ヴァーチャル活動群、低活動群の両群に比べ有意に高く ($p<.05$)、対人活動中心群が低活動群に比べ有意に高かった ($p<.05$)。「自尊心」は、対人活動中心群が、授業出席勉強群、ヴァーチャル活動群の両群に比べ有意に高く ($p<.05$)、「対人マナー」に関しては、授業出席勉強群、自主勉強中心群、高活動群、対人活動中心群の各群が、低活動群に比べて有意に高かった ($p<.05$)。

日常生活スキルは、効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の働き(島本・石井, 2006)であり、評価尺度として「親和性」「リーダーシップ」「計画性」「感受性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」「対人マナー」と多くの項目を扱っている。そのため、時間の使い方 6 タイプの特徴を反映した結果となった。すなわち、「親和性」「リーダーシップ」「感受性」が、他者との関係を重視する対人活動中心群において高く、「計画性」「情報要約力」については、自身で計画を立てて勉強していく「自主勉強中心群」において高かった。

③ 社会的自己制御

表 3-2-4 には、社会的自己制御(原田ら, 2008)の 3 下位尺度の平均値について、大学生生活の過ごし方 6 タイプごとに示してある。「自己主張」「持続的対処・根気」「感情・欲求抑制」の 3 下位尺度ごとに 1 要因の分散分析をおこなった。その結果、「自己主張 ($F(5,690) = 4.62$, $p<.001$)」「持続的対処・根気 ($F(5,695) = 6.70$, $p<.001$)」「感情・欲求抑制 ($F(5,692) = 3.07$, $p<.01$)」の全てにおいて、大学生生活の過ごし方タイプの主効果が有意だった。

次に、これら 3 項目に関して大学生生活の過ごし方タイプによる違いを、Tukey の HSD 法により検定した。「自己主張」は、自主勉強中心群が、ヴァーチャル活動群、低活動群の両群に比べ有意に高く ($p<.05$)、対人活動中心群が、低活動群に比べて有意に高かった ($p<.05$)。また、授業出席勉強群がヴァーチャル活動群に比べ有意に高かった ($p<.05$)。「持続的対処・根

表 3-2-4 大学生生活の過ごし方 6 タイプにおける社会的自己制御の平均値

	授業出席 勉強群 (a)		ヴァー チャル活 動群 (b)		自主勉強 中心群 (c)		高活動群 (d)		対人活動 中心群 (e)		低活動群 (f)		合計		F	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
自己主張	3.18	0.61	3.01	0.61	3.40	0.52	3.22	0.48	3.25	0.52	3.07	0.62	3.16	0.59	4.62***	b<a/b, f<c
持続的対処	3.47	0.62	3.20	0.57	3.69	0.65	3.58	0.56	3.44	0.58	3.32	0.61	3.42	0.61	6.70***	b, f<c, d
感情・欲求抑制	3.48	0.56	3.37	0.60	3.67	0.56	3.63	0.53	3.53	0.57	3.43	0.56	3.49	0.57	3.07**	b<c

注: ** $p<.01$ *** $p<.001$

気」は、自主勉強中心群と高活動群が、ヴァーチャル活動群および低活動群に比べ有意に高かった ($p<.05$)。「感情・欲求抑制」は、自主勉強中心群が、ヴァーチャル活動群に比べ有意に高かった ($p<.05$)。

社会的自己制御は、社会的場面で、個人の欲求や意思と現実認識との間でずれが起こった時に、内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張するもしくは抑制する能力 (原田ら, 2008) であり、「自己主張」「持続的対処・根気」「感情・欲求抑制」の3項目から成っているが、この3項目ともに「ヴァーチャル活動群」「低活動群」は何らかの他のタイプに比べて有意に得点が低かった。この両タイプは、個人の欲求や意思と現実認識との間でずれが起こった時には、「逃避」という行為に出やすい群と考えられ、自己主張や自己抑制を使うことが困難なタイプといえる。

以上をまとめると、大学生生活の過ごし方タイプとそれぞれの心理的特徴には明確な関係があり、今回取り上げた「学校への適応感」「日常生活スキル」「社会的自己制御」の3つの心理的特徴に関しては、「対人活動中心群」「高活動群」「自主勉強中心群」が好ましい過ごし方タイプであり、「ヴァーチャル活動群」「低活動群」は改善の余地が大きいタイプといえる。

〔宮崎伸一〕

3.3 大学生の希望進路・職種、進路探索行動について (1年生～3年生)

3.3.1 希望する進路の決定

希望する進路の決定度について、「希望する進路がすでに決まっている」「希望する進路がある程度決まっている」「希望進路については考えているが決まっていない」「希望する進路についてまだ考えていない」の4つの選択肢の中から回答を求めたところ、表3-3-1のような回答を得た。

希望進路に関して「すでに決定している」あるいは「ある程度考えている」という学生は、各学年ともに約半数であり、進路をある程度以上考えているという結果が出た (1年生50.0%, 2年生52.7%, 3年生55.8%)。

表 3-3-1 学年による希望進路決定状況の人数

	希望進路決定	希望進路ある程度決定	希望進路考えているが未決定	希望進路まだ考えていない	合計
1 年生	44 (13.4%)	120 (36.6%)	116 (35.4%)	48 (14.6%)	328
2 年生	23 (18.1%)	44 (34.6%)	47 (37.0%)	13 (10.2%)	127
3 年生	17 (11.7%)	64 (44.1%)	56 (38.6%)	8 (5.5%)	145
合計	84	228	219	69	600

「希望進路は考えているがまだ決定していない」という学生は1年生で35.4%，2年生37.0%，3年生38.6%が未決定だった。希望進路を決定していない学生は各学年ともに同じような割合であった。夏休み前のこの時期，就職に関して，3年生はまだ1～2年生と同じような感覚でいるようだ。「希望進路をまだ考えていない」という学生は，1年で14.6%，2年生10.2%，3年5.5%であった。3年生はほかの学年よりも若干低かった。

3.3.2 希望する職種

大学卒業後の希望進路に関して、「すでに決まっている」あるいは「ある程度決まっている」と回答した学生を対象に，どのような職種について考えているか質問した結果が表3-3-2である。1年生から3年生までの希望している職種を見ると，「一般職」を希望している学生が全体の27.5%，「地方公務員」20.1%，「国家公務員」15.0%，「総合職」11.7%，「進学」11.4%，「その他」であった。学年ごとにこれを見ると，1年生では「一般職」が25.7%と高く，次に「国家公務員」21.2%，次に「地方公務員」16.8%，「進学」12.8%，「その他」と続く。2年生では，「地方公務員」が27.3%と高く，次に「一般職」25.8%，「進学」21.2%，「国家公務員」9.1%，「総合職」6.1%，「その他」であった。3年生では「一般職」32.6%，「総合職」23.6%，「地方公務員」21.3%，「教師」7.9%，「国家公務員」6.7%，「その他」であった。

3年生では希望する職種の「一般職」と「総合職」を合わせると56.2%で，過半数の学生が企業へ就職を希望していることを示す。1年生や2年生の時に「総合職」を希望している学生の値は低いが（それぞれ7.8%，6.1%），3年生になると職業として「総合職」を希望する値が23.6%へと上昇していた。

1年生の時に希望している「国家公務員」については，2年生，3年生では9.1%，6.7%と

表 3-3-2 学年ごとの希望する職種の内訳

	一般職	総合職	地方公務員	国家公務員	教師	進学	起業	フリーター	その他	合計
1 年生	46 (25.7%)	14 (7.8%)	30 (16.8%)	38 (21.2%)	4 (2.2%)	23 (12.8%)	1 (0.6%)	1 (0.6%)	22 (12.3%)	179
2 年生	17 (25.8%)	4 (6.1%)	18 (27.3%)	6 (9.1%)	1 (1.5%)	14 (21.2%)	1 (1.5%)	1 (1.5%)	4 (6.1%)	66
3 年生	29 (32.6%)	21 (23.6%)	19 (21.3%)	6 (6.7%)	7 (7.9%)	1 (1.1%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)	5 (5.6%)	89
合計	92 (27.5%)	39 (11.7%)	67 (20.1%)	50 (15.0%)	12 (3.6%)	38 (11.4%)	3 (0.9%)	2 (0.6%)	31 (9.3%)	334

減少していた。「進学」希望についても、1年生が12.8%、2年生が21.2%を希望していたが、3年生は1.1%と低くなっていた。3年生の夏休み前の時期では、秋から始まる就活シーズンが予想できる時期になるので、数ヶ月後には企業のセミナーを受け企業の入社試験を受けるという選択をするか否かの決定を迫られる時期に入る。1～2年生の頃は漠然と、「公務員」や「進学」という選択肢があると考えていた状態から、3年生になると「たぶん就活をするだろう」という絞り込みの時期になるのだろう。半数以上の3年生は企業へ就職するという進路を希望し、3年生では国家公務員志望は減っていた。

3.3.3 進路決定状況と進路探索行動との関連

表3-3-3には、希望進路の決定状況別の進路探索行動の3下位尺度の平均値を示した。希望進路決定状況を独立変数、進路探索行動尺度(若松, 2006)の3下位尺度(自己内省, 情報収集, 外的活動)を従属変数として1要因の分散分析をおこなった。「自己内省」, 「情報収集」, 「外的活動」ともに有意な主効果が見られた(自己内省: $F(3,582) = 29.72, p < .001$, 情報収集: $F(3,578) = 49.89, p < .001$, 外的活動: $F(3,582) = 27.14, p < .001$)。

次にTukeyのHSD法による多重比較をおこなった。「自己内省」については、「希望進路決定」群が「希望進路ある程度決定」よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。さらに、「希望進路決定」群は、「希望進路考えているが未決定」, 「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。「希望進路ある程度決定」群は、「希望進路考えているが未決定」群, 「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。「希望進路考えているが未決定」群は、「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。「情報収集」については、「希望進路決定」群が、「希望進路ある程度決定」群, 「希望進路考えているが未決定」群, 「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。「希望進路ある程度決定」群は、「希望進路考えているが未決定」群, 「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。「希望進路考えているが未決定」群は、「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった($p < .05$)。

表 3-3-3 希望進路決定状況と進路探索行動

	希望進路決定(a)		希望進路ある程度決定(b)		希望進路考えているが未決定(c)		希望進路まだ考えていない(d)		合計	F	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
自己内省	13.90	3.88	12.31	3.56	10.58	3.65	9.01	4.04	11.51	3.96	29.72* d<c<b<a
情報収集	13.90	3.68	11.95	3.47	9.67	3.59	7.82	4.01	10.90	4.04	49.89* d<c<b<a
外的活動	12.94	5.05	11.56	3.95	9.17	3.65	8.69	4.31	10.54	4.32	27.14* c, d<b<a

注: * $p < .05$

「外的活動」については、「希望進路決定」群は、「希望進路ある程度決定」群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。さらに、「希望進路決定」群は、「希望進路考えているが未決定」群、「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。「希望進路ある程度決定」群は、「希望進路考えているが未決定」群、「希望進路まだ考えていない」群よりも有意に得点が高かった ($p<.05$)。「希望進路考えているが未決定」群と「希望進路まだ考えていない」群との間に有意差は見られなかった。

希望進路決定状況と進路探索行動との関連を分析した結果、次のようなことが明らかになった。希望進路を決定している学生ほど進路探索行動の「自己内省」、「情報収集」、「外的活動」それぞれの得点が高かった。希望進路決定度合いが強いほど、進路探索行動をおこなっているといえる。

大学生が進路を決定する際にどのような要因が決定の決め手になるだろうか。進路の決定については職業の選択と大いに関係しているようである。大学生になるまでの進学を決める過程とは違い、大学生が職業進路を決定するにあたっては選択肢の幅が広がることから、就職活動が始まる3年生の秋になると大いに戸惑う。進路決定に際しては、社会に出てこれからの長い人生をどう生きるかという自分の“生き方”に関連してくるし、またいまだに教育機関の中にいる学生にとって、世の中の産業や経済、労働に関する知識や実態について把握できていない。1年生～3年生の進路決定の度合いが高い学生ほど、進路探索行動をおこなっているという結果から、進路決定と進路探索行動とは関連性があるといえるだろう。進路決定に直接的にどの探索行動が関係しているのか、どのように作用しているのかは今後さらなる調査が必要である。

データ収集の時期が主に7月であったということが原因してだと思われるが、3年生の進路決定度合いや希望職種の傾向は、1年生や2年生のそれらとあまり変化がなかった。この調査を企業の就職案内が解禁される秋以降でおこなったならば、3年生の状況が1年生や2年生と変わってくるであろう。

[早川宏子・早川みどり]

3.4 大学生の進路選択・決定状況、進路探索行動について（4年生）

3.4.1 就職活動の開始時期

就職活動の時期を何年生の何月頃に開始したかを質問したところ、平均して3年生の12月頃に開始しており、標準偏差は約5ヶ月であった（表3-4-1）。

世間一般で言われる2013年度の就職活動開始は公に12月からとされており、今回の結果は情

表 3-4-1 4年生の進路決定状況4群における就職活動開始時期の平均値

	n	平均値	SD	F	多重比較
内定有・進路決定(a)	88	3.80 (3年生1月)	0.29 (3.5ヶ月)	6.02***	d<a
内定有・進路未決定(b)	6	3.71 (3年生12月)	0.16 (1.9ヶ月)		
内定無・進路決定(c)	11	3.61 (3年生11月)	0.55 (6.6ヶ月)		
内定無・進路未決定(d)	12	3.31 (3年生7月)	0.79 (9.5ヶ月)		
合計	117	3.73 (3年生12月)	0.42 (5.0ヶ月)		

注：数値は1年(12ヶ月)を1.00としたもの。

()内には12ヶ月表記による学年または時間を記載した。

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

勢に合致したものとなった。

3.4.2 卒業後の進路

進路の決定有無にかかわらず、決定済みの場合はその職種を、未決定の場合は希望職種を回答させた。その内訳は「一般職」13名(123名中10%)、「総合職」78名(63%)、「地方公務員」10名(8%)、「教師」3名(2.4%)、「進学」9名(7.3%)、「フリーター」2名、「希望職種なし」2名、その他6名であった。

この結果については、近年の本学卒業生における調査において、約60%が一般企業、8%が公務員、1.5%が教員、12%が進学という進路割合になっている状況に概ね符合する結果であると思われる。

3.4.3 卒業後の進路決定状況に関する満足度、内定数・合格数

卒業後の進路決定状況に関する満足度について、100点を最高点として10点間隔で自己評定させた。回答者の平均値は72.2点(SD差24.6点)となり、進路決定者の満足度は概ね高い状況にあると捉えることができる。

内定や合格を得ている4年生のみを対象に、その数を回答させた。内定数や合格数の平均値は2.1(SD差1.2)であった。

本研究では卒業後の進路決定について検討するために、現時点での進路決定状況の満足度と内定の数を調査した。これらはそれぞれ満足度という心理的な変数と、内定という客観的な変数をそれぞれ調査したものであった。心理的な変数だけでは、卒業後の進路を十分に検討できるとは言えず、また、内定の数を検討するだけでは、自身の進路決定に対してどのように捉えているのかを検討することはできないと考えられた。

そこで今回の分析では、これらの心理的な変数と客観的な変数の積を求めることで、両者の総合得点として用いることとした。心理的な変数としては、進路決定満足度を用い、客観的な変数としては、内定数に1を加算したものを得点としたものを用いた。内定数に1を加算したのは、内定数が0の参加者の積を算出した場合、心理的な変数によらず総合得点が0となってしまうためであった。総合得点の算出は以下の手順を踏んだ。

まず、進路の決定状況をもとに、内定の有無に対して、内定の無い者を1、内定のある者を0とした。次に、内定数の結果をもとに、内定の得られた者に関しては内定の数に1を足したものを算出した。この時、内定を得られていない者は計算に用いなかった。これらの内定の有無と内定数を合計することによって、内定の無い者が1、内定のある者は内定数に1を加点した変数を作成した。この得点の内定数を指す客観的な得点となった。さらに、ここで作成した内定数の新しい指標と進路状況に対する満足度の積を算出することで、心理的な指標と内定数を考慮した変数を作成した。ここでは内定数と満足度から得られた変数を進路決定満足指数と名付けた。進路決定満足指数については、次項の分析において用いた。

3.4.4 進路決定の有無と進路探索行動、進路決定満足指数との関係

まず、4年生の進路決定について、「内定有・決定」、「内定有・未決定」、「内定無・決定」、「内定無・未決定」の4群によって、就職活動の開始時期に差が見られるかどうかを検討した。表3-4-1には、4群の就職活動の開始時期の平均値を示してある。

1要因の分散分析の結果、群の主効果が有意だった ($F(3,113)=6.02, p<.001$)。TukeyのHSD法による多重比較の結果、内定や合格があり、進路についても決まっている群は、内定や合格を得ず、進路も決まっていない群に比べて遅い時期に就職活動を始めたことが明らかになった ($p<.05$)。

次に、4年生の卒業後の進路決定状況によって、在学中の進路探索行動に違いが見られるのか、また、進路決定の満足指数について違いが見られるのかを分析した。

卒業後の進路決定状況を独立変数、「進路探索行動」、「進路決定満足指数」を従属変数とした1要因の分散分析をおこなった。なお、卒業後の進路決定状況を独立変数にする際、「5.卒業後の進路については、まだ考えていない」を選んだ学生が1名だったため、分散分析から除外した。

表3-4-2は、進路決定状況ごとの進路探索行動、進路決定満足指数の平均値を示したものである。

進路の決定および、内定の有無によって、進路探索行動の各尺度に有意な主効果は見られな

表 3-4-2 進路決定状況 4 群における進路探索行動, 進路決定満足指数の平均値

		n	平均値	SD	多重比較結果
自己内省	内定有・進路決定(a)	87	3.59	0.93	
	内定有・進路未決定(b)	6	3.83	0.77	
	内定無・進路決定(c)	13	3.19	0.65	
	内定無・進路未決定(d)	16	3.31	1.09	
	合計	122	3.52	0.92	
情報収集	内定有・進路決定(a)	87	3.54	0.86	
	内定有・進路未決定(b)	6	3.79	0.90	
	内定無・進路決定(c)	12	3.00	1.20	
	内定無・進路未決定(d)	15	3.37	1.08	
	合計	120	3.48	0.93	
外的活動	内定有・進路決定(a)	86	2.66	0.84	
	内定有・進路未決定(b)	6	2.87	1.06	
	内定無・進路決定(c)	13	2.35	0.88	
	内定無・進路未決定(d)	16	2.35	0.90	
	合計	121	2.60	0.86	
進路決定満足指数	内定有・進路決定(a)	88	23.22	11.18	
	内定有・進路未決定(b)	5	18.20	14.36	
	内定無・進路決定(c)	11	5.55	3.14	c, d<a
	内定無・進路未決定(d)	17	4.82	3.40	
	合計	121	18.82	12.57	

かった。一方、進路決定満足指数については、進路決定状況の主効果が見られた ($F(3.117) = 22.69, p < .001$)。Tukey の HSD 法による多重比較の結果、内定や合格があり、進路についても決まっている群は内定や合格を得ていないが、進路は決まっている群や、内定や合格を得ず進路も決まっていない群に比べて進路決定の満足指数が高いことが明らかになった ($p < .05$)。

3.4.5 希望職種と就職活動開始時期, 進路決定満足指数との関係

希望する職種ごとの就職活動開始時期, 進路決定満足指数の平均値を示したのが表 3-4-3 である。希望する職種を独立変数, 就職活動時期や進路決定満足指数を従属変数とした 1 要因の分散分析の結果, 就職活動開始時期 ($F(7,110) = 4.62, p < .001$) と進路決定満足指数 ($F(7,114) = 6.64, p < .001$) において主効果が有意だった。

Tukey の HSD 法による多重比較の結果, 調査時期に「希望職種がない」群は, そうでない群に比べて, 就職活動の開始時期が遅いことが明らかになった。あくまでも推測でしかないが, 希望職種がない群は他の群に比較して極端に早期に就職活動を開始しているように見られるが, 活動は早いものの, 早期に挫折してしまったと見るべきか, 思い悩んだ挙げ句, 希望の職種が見つからないという状況にあるのかもしれない。

進路決定満足指数に関して, 「総合職」を希望する学生は「一般職」, 「地方公務員」, 「進学」を希望する学生よりも進路決定満足指数が高いことが明らかになった。

表 3-4-3 職種ごとの就職活動時期および進路決定満足指数の平均値

	n	平均値	SD	多重比較結果	
就職活動 開始時期	一般職(a)	12	3.72	0.09	
	総合職(b)	79	3.79	0.28	
	地方公務員(c)	9	3.57	0.48	
	教師(d)	2	3.63	0.18	
	進学(e)	7	3.82	0.59	g<a, b, c, d, e, f, h
	フリーター(f)	2	3.92	0.24	
	希望職種なし(g)	2	2.42	1.89	
	その他(h)	5	3.42	0.69	
合計	118	3.73	0.41		
進路決定 満足指数	一般職(a)	14	11.29	8.43	
	総合職(b)	77	23.77	12.12	
	地方公務員(c)	9	8.22	7.36	
	教師(d)	3	9.67	7.64	
	進学(e)	9	10.78	8.04	a, c, e<b
	フリーター(f)	2	5.00	7.07	
	希望職種なし(g)	2	5.00	5.66	
	その他(h)	6	12.17	8.75	
合計	122	18.70	12.59		

〔村井剛〕

3.5 大学生で獲得する能力と進路決定の構造

3.5.1 分析方法

大学生が大学生活を通して獲得すると考えられる諸要因と、学生の適応や就職活動との関連を統合的に検討するために1～3年生と4年生を分けて構造方程式モデリングを用いて分析した。各尺度の平均値、標準偏差、相関を表3-5-1と表3-5-2に示した。表3-5-1では1～3年生のデータを示し、表3-5-2に4年生のデータを示した。

表 3-5-1 1～3年生における各尺度の平均値、標準偏差、相関

	日常生活スキル	学校適応感	進路探索行動	平均値	標準偏差
社会的自己制御	0.65***	0.46***	0.27***	31.98	4.18
日常生活スキル		0.68***	0.32***	8.21	1.25
学校適応感			0.21***	16.94	4.38
進路探索行動				2.53	0.84

注：* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表 3-5-2 4年生における各尺度の平均値、標準偏差、相関

	日常生活スキル	学校適応感	進路探索行動	進路決定満足度	平均値	標準偏差
社会的自己制御	0.68***	0.37***	0.53***	0.27***	33.56	4.01
日常生活スキル		0.64***	0.51***	0.29***	8.77	1.30
学校適応感			0.40***	0.26***	18.19	4.60
進路探索行動				0.30***	3.11	0.79
進路決定満足度					19.16	12.59

注：* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

3.5.2 1～3年生における分析結果

1～3年生のモデルでは社会的自己制御, 日常生活スキル, 学校適応感, 進路探索行動の関連を検討した. 1～3年生における大学生生活を通して獲得される要因と適応感, 進路探索行動の関連に関する仮説を図3-5-1に示した.

社会的自己制御の向上は日常生活スキルに良い影響をもたらし, 日常生活スキルの向上が適応に影響すると予測された. また, 社会的自己制御, 日常生活スキル, 適応感は進路探索行動に影響することが予測された.

これらの仮説に基づき, Amos20を用いて構造方程式モデリングをおこなった. 有意でないパスを取り除き分析を繰り返した結果, 図3-5-2に示した結果が得られた. 以下のモデルの適合度は $GFI=.99$, $AGFI=.99$, $CFI=1.00$, $RMSEA=.00$ (90%cl: .00～.06) と十分な適合度が得られた.

図3-5-2に示した結果によると, 社会的自己制御は日常生活スキルに正の影響を与え, 日常生活スキルが適応感に正の影響を与えることが示された. また, 進路探索行動に対しては社会的自己制御と日常生活スキルが正の影響を与えることが示された.

この結果から1～3年生において, 学校で適応するためには直接的には日常生活スキルの向

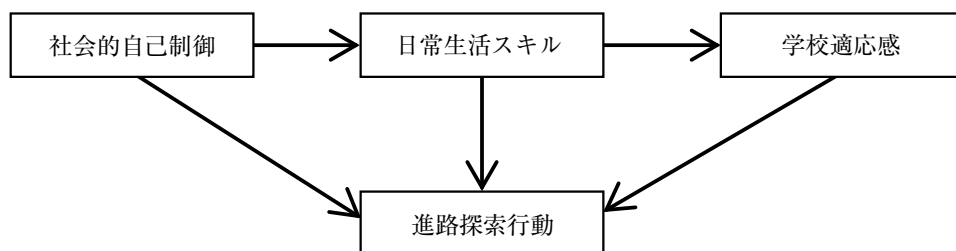
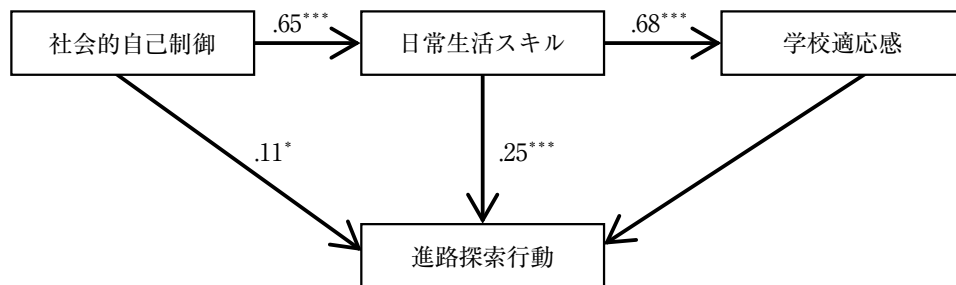


図3-5-1 1～3年生における諸要因の構造の仮説モデル



注: * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

図3-5-2 本研究から得られた1～3年生における諸要因の構造モデル

上が重要な役割を果たすことが明らかになった。また、日常生活スキルの向上のためには社会的自己制御の発達が必要であることも同時に明らかになった。

3.5.3 4年生における分析結果

4年生のモデルでは1～3年生のモデルで検討した社会的自己制御、日常生活スキル、適応感、進路探索行動の関連に加えて、内定の有無と進路決定状況の満足度を統合した進路決定満足指数との関連を検討した。4年生における大学生活を通して獲得される要因と適応感、進路探索行動、進路決定満足指数の関連に関する仮説を図3-5-3に示した。

大学生活で獲得される諸要因と心理的な適応および進路探索行動の関連については、1～3年生と同様であると考えられた。つまり、社会的自己制御の向上は日常生活スキルに良い影響をもたらし、日常生活スキルの向上が適応に影響すると予測された。また、社会的自己制御、日常生活スキル、適応感は進路探索行動に影響することが予測された。これらの仮説に加えて、4年生のモデルでは進路探索行動が進路決定満足度に影響を与えることが予測された。

これらの仮説に基づき、Amos20を用いて構造方程式モデリングをおこなった。有意でないパスを取り除き分析を繰り返した結果、図3-5-4に示した結果が得られた。以下のモデルの適合度は $GFI=0.95$, $AGFI=0.87$, $CFI=0.95$, $RMSEA=0.115$ (90%cl: .03~.19) と $RMSEA$ の値は不十分だが、それ以外において十分な適合度が得られたことと、他のモデルと比較しても AIC の値 ($AIC=31.99$) が低かったことから、図3-5-4に示したモデルが適切であると考えられた。

図3-5-4に示した結果によると、社会的自己制御は日常生活スキルに正の影響を与え、日

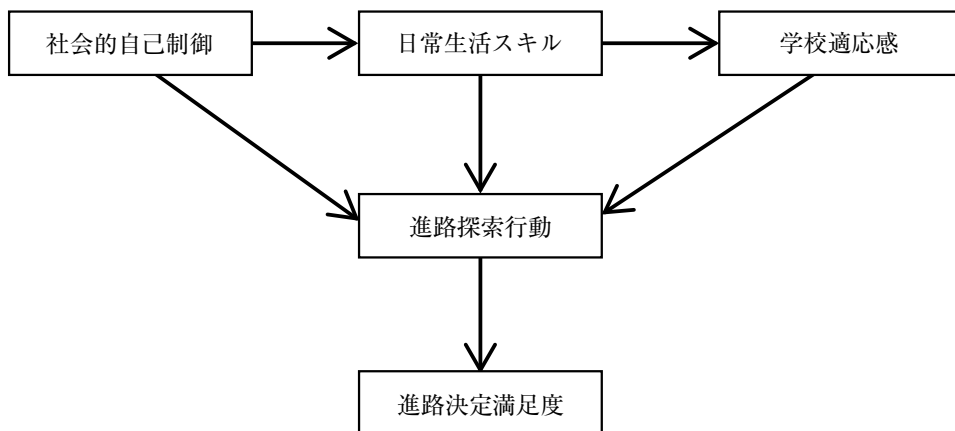
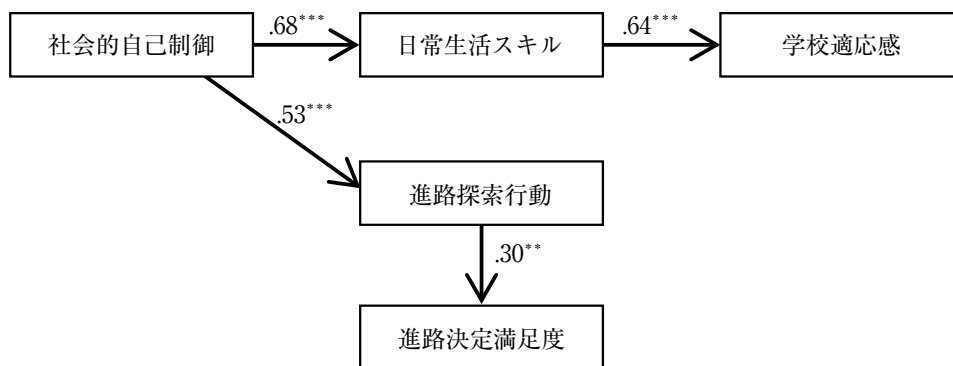


図3-5-3 4年生における諸要因の構造の仮説モデル



注 : * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

図 3-5-4 4 年生における諸要因の構造モデル

日常生活スキルが適応感に正の影響を与えることが示された。また、進路探索行動に対しては社会的自己制御が正の影響を与えることが示された。また進路探索行動が進路決定満足度に対して正の影響を与えることが示された。

この結果から 4 年生において、まず 1～3 年生と同様に、学校で適応するためには直接的には日常生活スキルの向上が重要な役割を果たすことが明らかになった。同時に、日常生活スキルの向上のためには社会的自己制御の発達が必要であることも明らかになった。また、進路決定という面においては、社会的自己制御が高くなるほど進路探索行動をおこなっていたことが明らかになった。進路探索行動が進路決定満足指数に影響することからも、社会的自己制御の重要性が示された。

[永井暁行]

4. 総合的考察

本研究の目的は、次の 2 点であった。第 1 は、異なる大学生生活の過ごし方をしている学生の間で、日常生活スキルや社会的自己制御、学校適応感に差異が見られるかどうかを明らかにすることであった。第 2 は、大学 1～4 年生における進路選択・進路決定の実際の状況の実態を検討するとともに、社会的自己制御・日常生活スキル・学校適応感が進路探索行動や進路決定満足度に及ぼす影響を明らかにすることであった。

ここでは、大学生生活で獲得する諸能力と大学卒業後の進路選択についての関連を明らかにするためにおこなった、構造方程式モデリングの結果を中心に総合的な考察をおこなうこととする。分析の結果、学校への適応については、社会的自己制御が日常生活スキルに影響を与え、

日常生活スキルが学校適応感に影響するという過程の存在が示唆された。また、進路選択については1～3年生と4年生において異なる結果となったが、進路探索行動が進路決定満足指数に影響するという過程は一致していた。

まず、大学への適応感の結果については1～3年生における分析も4年生における分析も同様の結果が得られたことから、学年を問わず、学校適応には日常生活スキルの役割が大きいものと考えられる。島本・石井(2006)によるとライフスキルは「効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の働き」と定義される。谷島(2005)においても、学力面での適応困難とともに、人間関係や社会生活における適応困難の問題の増加が指摘され、前者だけでなく後者への対応も必要であるとされている。このような大学生活における適応困難の背景には、日常生活スキルに示されるような対人場面等における有効なスキルの獲得が重要になってくると考えられる。島本・石井(2006)においても、このような学生の抱く問題に対して、大学側の積極的な働きかけが緊急な課題になりつつあり、学生自身も、社会人として自立していくために対人関係能力等を高めていく必要があるだろうと指摘している。

本研究ではこの日常生活スキルの獲得に重要な役割を果たす要因として、社会的自己制御が存在していることが示された。社会的自己制御は原田ら(2008)によると「社会的場面で、個人の欲求や意思と現状認知との間でズレが起こった時に、内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張するもしくは抑制する能力」とされる。この点で先の日常生活スキルや、「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」と定義される社会的スキル(菊池, 1988)に類似する点はあるが、原田ら(2008)は関係性や内面的な心性も含めた自己という相対的なシステムの調整プロセスを意味する自己制御とは概念的に異なることを指摘している。今回の結果からも心理的プロセスである社会的自己制御の発達によって、日常生活スキルの獲得がなされるという過程が示されたと言える。

都筑ら(2013)は大学生の心理的特徴について、学生の本分である学業以外の対人的な活動や部活動・サークル活動に関わることによって学生は卒業後に必要とされる能力を獲得していくと指摘した。都筑ら(2013)によって示された学業以外の対人的な活動を円滑に進めるための能力が本研究では社会的自己制御にあたり、この社会的自己制御の発達が日常生活スキルの獲得を促進する。大学生の日常生活は家族、友人、恋人、教員あるいはアルバイト先の人間関係など、様々な人と多様な関わりの上に成り立っている。また、大学生は授業や研究、あるいは将来のための勉強など、それぞれの目的を持って大学生活を送ることが求められている。このような大学生活に適応する上では、自身の行動や感情などを制御あるいは主張できる社会的自己制御の発達と、日常的な場面で必要とされる日常生活スキルの獲得が重要であると言え

る。

次に、進路についての結果は、1～3年生と4年生では、進路探索行動に対する影響に違いが見られた。1～3年生では社会的自己制御と日常生活スキルが進路探索行動に正の影響を与えていたものの、4年生では社会的自己制御のみが進路探索行動に影響を与えるという結果が示された。この結果は特に1, 2年生ではまだ進路についての情報探索をおこなっている学生が少なかったために現れたのではないかと考えられる。1～3年生においては日常生活スキルが獲得できているほど、将来についての情報を探索することにも積極的であったことが示唆される。

一方、社会的自己制御は1～3年生においても、4年生においても進路探索行動に正の影響を与えていることが示された。若松(2006)は大学生の進路決定の難しさを、職業は進学先のように一次的にランク付けされていないこと、無数と言ってよいほどの膨大な選択肢が存在すること、選択の結果はその人自身の人生や生き方と長い年月にわたって関わること、そして情報が得にくい部分や偶発的に決まる部分が多いことから意思決定の判断材料が揃えにくいと評価している。このように困難な進路決定を乗り越えるためにも進路探索行動が必要となるが、進路についての情報を能動的に探索するという行動にも同様の難しさは伴うものと考えられる。この進路探索について影響した社会的自己制御は、その定義にもあるように、外的基準の必要性に応じて自己を主張したり、自己を抑制したりする能力である。将来のための情報を探索するという行動は、将来を見据えた上で、目先の欲求を抑制した上でおこなわれる行動である。そのため、社会的自己制御能力は進路探索において重要な役割を果たすと考えられる。

そしてこの進路探索の重要性は若松(2006)においても言及されているが、本研究においても、4年生を対象とした進路決定満足度に影響することが示された。進路探索行動を実行していた4年生ほど、進路決定の結果とその結果に対する満足度を高く持てることが明らかになった。この結果はこれまでの先行研究の結果(浦上, 1994)にも合致したものである。進路選択に対して積極的に取り組むことは、大学を卒業した後の進路決定に良い影響を与えることが本研究からも示された。

[永井暁行]

付記 本研究に於ける調査は、2013年6月18日開催の保健体育研究所倫理委員会での承認を受けて実施されたものである。

本研究における質問紙の実施に当たっては、経済学部高橋雅足教授、高村直成准教授の協力を得た。ここに謝意を表したい。

文 献

- Gore, P. A. (2000) Cluster analysis. In H. E. A. Tinsley & S. D. Brown (Eds.), *Handbook of applied multivariate statistics and mathematical modeling* (pp. 297-321). San Diego, CA: Academic Press.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008) 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連 パーソナリティ研究 17 : 82-94.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する 川島書店. pp.187-204.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., et al. (2008a) Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, 42 : 58-82.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す— 京都大学高等教育研究 15 : 107-118.
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因 : 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究 53 : 307-319.
- Schwartz, S. J., Beyers, W., Luyckx, K., Soenens, B., Zamboanga, B. L., Forthun, L. F., . . . Waterman, A. S. (2011) Examining the light and dark sides of emerging adults' identity: A study of identity status differences in positive and negative psychosocial functioning. *Journal of Youth and Adolescence*, 40 : 839-859.
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究 54 : 211-221.
- 谷島弘仁 (2005) 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究 (文教大学) 27 : 19-27.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2011) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 中央大学保健体育研究所紀要 29 : 7-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2012) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (2) 中央大学保健体育研究所紀要 30 : 1-33.
- 都筑学・早川宏子・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・金子泰之・永井暁行・梁晋衡 (2013) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (3) 中央大学保健体育研究所紀要 31 : 1-34.
- 浦上昌則 (1994) 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究—「進路選択に対する自己効力」の影響— 青年心理学研究 6 : 40-49.
- 若松養亮 (2006) 教員養成学部生における進路探索行動と意思決定の関連—11月時点の3年次生を対象に— 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 56 : 139-149.